


実践例 「学習指導の充実・深化」

「課題7 学ぶ意欲を高める指導方法の改善・充実」

I 学校名  石狩市立聚富小中学校

II 研究の概要



1 研究主題

課題意識をもって学び、自分の思いや考えを豊かに表現する子どもの育成

2 研究領域・研究の年次計画

(1) 研究領域 全教科・全領域

(2) 研究の年次計画

1年次（平成27年度）	2年次（平成28年度）	3年次（平成29年度）
構想・計画・実践	実践・検証・定着	深化・評価・まとめ
<ul style="list-style-type: none">研究主題・仮説の設定研究内容の確定理論研究授業実践1年次のまとめと課題整理	<ul style="list-style-type: none">研究仮説の再検討理論研究の深化と充実授業実践石教振学校課題研究発表会2年次のまとめと課題整理	<ul style="list-style-type: none">授業実践成果と課題の確認研究のまとめ

3 研究仮説

仮説①

学習のプロセスを意識した授業づくりをすることにより、子どもたちは課題意識をもって学習に取り組むことができるであろう。

仮説②

言語活動の充実を目指した学習指導を行うことにより、子どもたちは自分の思いや考えを豊かに表現することができるであろう。

4 研究内容

目指す子ども像

①課題意識をもって
学習に取り組む子ども

②自分の思いや考えを
豊かに表現する子ども

研究内容①

(1) 学習プロセスの明確化

課題把握 (受信) → ① 考えをもつ (思考) → ② 考えを表現する (発信)
→ ③ 交流し、再考する (交流・深化) → まとめる → 振り返る

(自己評価)

(2) 課題設定の工夫

- ・課題の明確化
- ・わかりやすいテーマの設定
- ・話し合いのポイント・ねらいの明確化

(3) 伝え合う (交流) の場の設定の工夫

- ・どの場面で設定するのか。
- ・どのぐらいの時間をとるのか。

(4) 自己評価 (ふりかえり) の場の設定

- ・◎○△で表す
- ・記述で表す。

研究内容②

(1) 言語活動の充実を目指した学習指導 (参考：学びのステップアップ)

《考えをもつ》

- ・理由や具体例をあげて表現する
- ・ノートやワークシートの工夫

《考えを表現する》

- ・話型の活用
- ・聞き手を意識した話し方 (問いかけるなど)

《交流し、再考する》

- ・友達のよいところを見つける
- ・相違点を見つける
- ・自他の考えの違いやよさをみとめ合い、自分の考えを深める

(2) 教育活動全体を通じた場の設定

- ・シップ集会
- ・全校集会の学級発表
- ・作文発表
- ・作品発表会
- ・読書発表会

(1) 昨年度までは各ブロックごとに具体的な「目指す子ども像」を設定していましたが、今年度は「聚富小中学校版学びのステップアップ」を作成し、各ブロック・各学年の目標としたいと考えています。

(2) これまでの言語活動の充実を目標とした学習が、他教科や行事、日常生活で自分の考えを表現する場面で活かされていくよう教師も子どもたちも意識できるようにする。

5 研究実践

(1) 研究体制

- ・小中学校9年間を、前期、中期、後期の3つに分け、3ブロック体制で研究を進めていく。小学校は1年～2年を前期、3年～6年を中期に分けて進めていく。中学校は教科の特性・中心指導学年ごとに中期、後期に分かれて進めていく。
- ・各ブロックから推進委員1名を選出する。
- ・研究担当と推進委員で研究推進委員会を員構成し、研究の推進やブロック間の連絡・調整を行う。

(2) 授業研究

- ・一人一授業公開は全体研の前までに実施する。(全校研授業との関わりを明確にして実施する)
- ・全校研(小・中 各1) それ以外のブロックについてはブロック公開授業を行う。

(3) 平成28年度(今年度)の取り組み

①計画的な指導の積み上げ

「言語活動の充実」を通して子どもの「思考力の育成」を図るため、上記の中央教育審議会答申(平成20年1月)で示された6つ学習活動から、小学校各学年・中学校各教科にて、重点的に取り組ませる活動を選び、目標として定め、本年度の研究発表会までの指導計画を3期(第Ⅰ期:4月～6月、第Ⅱ期:7月～8月、第Ⅲ期:9月～11月)に分け、作成した。

思考力育成のための6つの活動例

- 体験から感じ取ったことを表現する
- 事実を正確に理解し伝達する
- 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- 情報を分析・評価し、論述する。
- 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

②思考の要素(すべ・手立て)の指導

6つの思考力を育てる学習活動で「思考力の育成」に取り組んできた第Ⅰ期の研究の反省では、児童生徒の思考力を育成するためには、より具体的な思考の要素(すべ・手立て)を明示的に与え児童生徒に身につけさせていく方が望ましいことがあげられた。そこで櫻本明美が、『説明的表現の授業～考えて書く力を育てる～』明治図書(1995)の中で提唱した「関係づける力」の6項目を「思考力の要素(すべ・手立て)」として採用し、学習中の思考過程で活用させることで、「思考力の育成」へとつなげることにした。

<6項目の思考力の要素(すべ・手立て)>

- **比較**: いくつかの物事を、同じところ、違うところ、似たところなどに目をつけて比べ、性質や特徴を明らかにする力。
- **順序**: 物事の手順、時間・空間・因果・関心の強さや重要さなどで順序づける力。
- **類別**: 目的に合う観点を決めて、いくつかの物事を他と区別したりまとめたりする力、また、類や層を明らかにする力。
- **理由づけ**: 物事の結果を引き起こした原因・判断を下した主な理由・連鎖や循環をなす因果関係などを明らかにする力。

- **定義づけ**：物事を抽象化して表したり、簡略に表したりする力、また、そのような言葉の意味内容を明らかにする力。
- **推 理**：知識や経験をもとにして、「知らない・分からない・これから」などの事物について、筋道立てて推し測る力。

以上を設定し、黒板掲示物を作成した。掲示物は小中学校どの教室でも、どの教科でも使用が出来るよう検討した結果、漢字と平仮名を併記したものを準備した。(表4)

表4 <思考力の要素(すべ・手立て)を表した黒板掲示>


(3) 家庭学習へつなげる指導

平成27年度に実施した2回分(11月と2月)の「しっぷ子どもアンケート」と平成28年度5月実施の計3回の結果をもとに、各質問項目間の相関を分析した。その結果、授業の最後の「振り返り」と「家庭学習の取り組み」の間に中程度の正の相関があることがわかった。このため、授業の「振り返り」の中で、家庭学習を意識させた指導を行うことは、家庭学習を促進する可能性があると考えた。そこで「振り返り」の場面で児童・生徒自身に学習の振り返りを行わせるとともに、家庭学習の働きかけを行うこととした。具体的には、「宿題」を課す場合もあれば、子ども自身が自発的に取り組めるような働きかけなど、発達段階に応じた指導のあり方も研究しているところである。


6 平成28年度の成果と今後の研究に向けて

これまでの取り組みにより、アンケートの結果や各種調査の結果からも、学力の向上のみならず、児童生徒の意識の向上も見られてきている。今年度は身につけさせたい思考力を、「思考力の要素」として6項目(①比較 ②順序 ③類別 ④理由づけ ⑤定義づけ ⑥推理)を採用し授業の中で明示的に示し、児童生徒が意識して活用できるようにした。その結果、児童生徒自身が課題に対して、見通しを持ち、自分なりの考え方を持つことができるようになっていきているなど、授業の様子も変容を見せている。今後これらの6項目が児童生徒の思考力をより高める「思考力の要素」として適当なものかどうかを検討するとともに、これまでの「学習プロセス」及び、9年間を通した言語活動のありかたを整理し、「シッパ版学びのスタイル」としてまとめたい。

Ⅲ 実践例

第1回 指導主事訪問 6月30日(木)	ブロック研での反省	事後研の概要	助言者より
【学 年】 小学5・6年 【教 科】 算数 【授業者】 大島 玲 	6年 ・既習事項を思い出すことができるように5年の教科書を活用した ・児童のみで考えをまとめるときに助けになるようにヒントカードを準備した 5年 ・自分の考えに自信がもてるように、まずはノ	○ヒントカードの活用が有効だった ○教師がつけられない場面での学習の進め方が児童に身についていた ○普通の授業のしつけができています ○ノートのマス目の配慮がよかった ○児童の「おかしいとは思いうけど」に対して「おかしいと思うのは大事な	・自分の考えを振り返ることが大切。なんとなく聞いて拍手をするのではだめ。 ・教師が発表に対してどのようにサポートするか。形式的なものではなく、児童が主体的に思考判断していくか。 ・既習事項を使って発表する機会をつくる。単元の指導計画を作成することも必要。 ・自力で学習するときの大事なポイントは3つ。①何を学習する

	<p>ートでまとめる時間を確保した</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童のみで考えをまとめるときに助けになるようにヒントカードを準備した 	<p>こと」という言葉かけがよかった</p> <ul style="list-style-type: none"> ○困ったときに一度止めて既習事項を確認させる場面が必要だった ○問題が難しいので、簡単な数字での確認したほうがよかった ○言語活動の面でも「もとにする数」か「くらべられる数」かを話し合わせた方がよかった 	<p>か②基本的な学習を駆使することができるか③分からない課題に出会ったときに自分なりの対応もっているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既習事項は「自分の中」「友達の中」「教師の中」「教科書とノートの中」にある。6年の授業で5年生の教科書をつかってもよい。 ・言語活動に向けて、児童の思考をつかさどるものは「感情の語彙」「思考の語彙」「感想評価の語彙」「知識の語彙」である。それらを使って言語活動ができるような学習過程を作る必要がある。 ・板書をカードにして時間短縮をする工夫が必要。時間の効率化を図るべき。 ・ガイド学習は複式に不可欠な学習訓練である。ヒントカードなどの複式ならではの配慮や手立てが必要。 ・児童が間違った答えや考えを出した時に授業は活性化する。間違えをみんなで考える場面を設定すべき。
<p>第2回 指導主事訪問 9月16日(金)</p>	<p>ブロック研での反省</p>	<p>事後研の概要</p>	<p>助言者より</p>
<p>【学 年】中学2年 【教 科】数学 【授業者】氏家 歴</p> 	<p>○課題を明確にし、見直しを立てる場面で比較を使うことで、問題解決へのイメージを持たせることができていた。</p> <p>○まとめ・振り返りの時間確保ができなかったため、前半部分のスリム化が必要だった。</p> <p>○『生徒』対『教師』の対話が多く、生徒の考えを生徒同士の中で確認できていない。生徒の考えを他の生徒に確認する場面を持つだけでも違っていた。</p>	<p>○問題を解く場面などで、生徒3人の動きが一致していなかった。早くできた生徒が教えるなど、工夫できたのではない。</p> <p>○作ってある掲示物を使いたい。</p> <p>○子ども同士の対話場を増やすなどして、言語活動を生かした授業展開にしていくべきである。</p> <p>○課題提示まで時間がかり過ぎていた。</p>	<p>○既習事項をうまく利用していくことが大事。 6つの思考はアクティブラーニングの深い学びに関係している。生徒の思考の流れにあっているかを考えるとよい。</p> <p>○条件の違いをはっきりと示すことで、問題を解く順番を考える。Aの考えとBの考えを別物にするのではなく、考えの共通点、比較、関連付けという志向もある。生徒がつまずきそうなところで6つの思考のどれかを貼ると効果的ではないか。</p> <p>○対話について次のような考えがある。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 自己内対話…自分の中で気づいたところ、をノートに書かせる。 ② 他者との対話…授業の中で先生との対話はあっ

			た。生徒同士の対話は難しいので、まずは先生が作っていく。わざと間違えたり、つなげたり、個と個がかかわる場面を意図的に作っていく。
<p>【学 年】小学2・4年</p> <p>【教 科】算数</p> <p>【授業者】印 倫 哲</p> 	<p>○授業全体の思考の流れを最後に振り返るようにした。</p> <p>○2年生の導入で、パワーポイントを用いることにした。(休んだため使えず)</p>	<p>○ポイントをしっかり示して、予想させている。</p> <p>○問題提示から課題提示していた。</p> <p>○書画カメラを発表の場面で活用することによって、子どもどうしの意見交流ができていた。</p> <p>○思考の方法を子ども達に聞いていた。</p> <p>○書画カメラを使って、発表も上手でした。</p> <p>○発表を意識してノートを書いていた。</p> <p>○思考力の要素を使用していた。</p> <p>○推理、定義付けなどがしっかり定着している。</p> <p>○カードをそろえると、更に板書がきれいに見えるところと思いました。</p>	<p>○学習過程を理解し、子どもたちは主体的に取り組んでいた。</p> <p>○指を指しながら発表できていた。</p> <p>○発表を形式的にするのではなく、対話的に行うとよい。</p> <p>○どのようにホワイトボード・黒板を使うか意識するとよい。</p>